

教 育 研 究 業 績

2021年5月1日

氏名 夏原 隆之

学位: 博士 (コーチング学)

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
スポーツ科学	スポーツ心理学, スポーツ科学, 実験心理学, サッカーコーチング,	
主要担当授業科目	健康・スポーツ科学, ゴール型スポーツ, 基礎ゼミⅠ, 基礎ゼミⅡ, 健康・スポーツ心理学演習, 卒業研究, コーチング心理学, 認知心理学, 心理データ処理Ⅰ, 運動制御論	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
1) リアクションペーパーによる双方向な教育方法の実践	2015年4月 (現在に至る)	講義・実技科目において, リアクションペーパーを用いて講義内容に関する課題・問いに対する回答・意見を求め, 学生の理解度を把握すると同時に, 授業の感想・要望・疑問点を自由記述してもらい, 講義内容の改善に努めた.
2 作成した教科書・教材		
1) 授業スライド資料の作成	2014年4月～	講義科目で使用するスライド資料をパワーポイントにて作成し, 授業にて投影し講義を進めるとともに, 資料として配布している. (健康・スポーツ科学, コーチング心理学, 心理データ処理Ⅰ, 運動制御論, 認知心理学, 心理学基礎研究法)
3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価		
1) 筑波大学における FD プログラム研修の受講およびティーチングフェローへの採用	2011年6月～ 2011年11月	教育能力を高めるための実践的方法に関する FD プログラム研修を受講し, ティーチングフェローとしての適性が評価された.
2) 授業評価アンケート	2015年4月 (現在に至る)	東京成徳大学や, 非常勤講師として複数の大学において学生による授業評価アンケートにより評価を受け, いずれの授業においても, 平均値と同程度あるいは平均値を上回る評価を得た.
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 東京都大島町ジュニアスポーツフェスティバル講師 (サッカー競技)	2011年9月	東京都・東京都体育協会・大島町体育協会・大島町教育委員会が共催するジュニアスポーツフェスティバルにおいて, サッカー競技の講師を務めた. 性別や年齢, 経験の有無を問わず, サッカーを通じてスポーツの楽しさや運動することの喜びを経験できるようなプログラムを立案し実践した.

2) 東京成徳大学子どもスポーツ教室の開催	2014年4月～ 2016年3月	東京成徳大学における学内研究プロジェクト「スポーツ教室活動を通じた学生の自己効力感の育成支援研究」活動として、八千代市教育委員会の後援を受け、東京成徳大学子どもスポーツ教室を夏季および春季に開催した。子どもスポーツ教室では、「スポーツ・運動の楽しさを知る」「スポーツを通じて色んな人とコミュニケーションをとる」ということをテーマに、様々なアクティビティーを行った。
3) 東京成徳大学サッカー部指導 千葉県大学サッカー連盟2部リーグ優勝, 1部昇格	2017年11月	東京成徳大学男子サッカー部の指導を通じて、2部リーグ優勝、翌年度の1部昇格を果たす。
5 その他 該当なし		

職 務 上 の 実 績 に 関 する 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1.資格、免許		
1) 中学校教諭1種免許状「保健体育」	2009年3月	新潟県教育委員会（平20中1第1057号）
2) 高等学校教諭1種免許状「保健体育」	2009年3月	新潟県教育委員会（平20高1第1058号）
3) 公益財団法人日本サッカー協会 公認C級コーチ・日本体育協会公認スポーツ指導員	2009年11月	日本サッカー協会（C000521559）
4) 中学校教諭専修免許状「保健体育」	2011年3月	新潟県教育委員会（平22中専第24号）
5) 高等学校教諭専修免許状「保健体育」	2011年3月	新潟県教育委員会（平22高専第35号）
6) 公益財団法人日本サッカー協会 公認B級コーチ・公益財団法人日本体育協会公認コーチ	2017年4月	日本サッカー協会（C000521559）
7) 公益財団法人日本サッカー協会 公認キッズリーダー	2017年8月	日本サッカー協会（C000521559）
8) 日本スポーツ心理学会公認スポーツメンタルトレーニング指導士	2020年4月	日本スポーツ心理学会
9) 公益財団法人日本スポーツ協会公認アシスタントマネージャー		日本スポーツ協会登録番号（0455679）
2.特許 該当なし		
3. 実務の経験を有する者についての 特記事項		

1) 東京成徳大学サッカー部における指導	2014年4月 (現在に至る)	東京成徳大学サッカー部の指導を行っている。
4. その他		
1) 日本体育学会茨城支部 2012年度若手研究発表奨励金の獲得	2012年7月	研究題目名：サッカーのパス動作における視覚行動の違いに関する研究
2) 茨城体育学会平成25年度若手研究発表奨励金の獲得	2013年7月	研究題目名：サッカーのパスレシーブ局面における視覚探索方略
3) 2016年度科学研究費助成事業における学術研究助成基金助成金(若手研究B)の獲得	2016年4月 ～ 2019年3月	課題番号：16K16525 研究課題：ジュニアサッカー選手における知覚運動スキル特性とその発達的变化の解明
4) 笹川スポーツ財団 2017年度笹川スポーツ研究助成における研究助成金の獲得	2017年4月 ～ 2018年2月	研究番号：17B3-017 研究課題：児童期および青年期の子どもにおける非認知スキルの発達とスポーツ活動との関連性に関する研究：スポーツの何が非認知スキルの獲得に寄与しているのか？
5) 教育新聞コラム「円卓」の執筆	2018年8月	教育新聞コラム「円卓」 テーマ：「非認知能力を育てることの大切さ」
5) 2019年度科学研究費助成事業における学術研究助成基金助成金(若手研究)の獲得	2019年4月 (現在に至る)	課題番号：19K20012 研究課題：課題の制約が知覚運動スキルに及ぼす影響の解明とトレーニングへの応用
6) 笹川スポーツ財団 2019年度笹川スポーツ研究助成における研究助成金の獲得	2019年4月 (現在に至る)	研究番号：19B2-033 研究課題：青年期の子どもを対象とした非認知能力アセスメントツールの開発

--	--	--

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 該当なし				
(学術論文)				
1) サッカーにおける選択的注意と知識の関係についてー競技レベルによる検討ー (学位論文)	単著	2011年3月	新潟医療福祉大学大学院修士課程 医療福祉学研究科 健康科学専攻 修士論文 pp 1-131	競技レベルの異なるサッカー選手の認知過程に対する内省報告から、選択的注意と知識の関係を検討し、選択的注意と知識の間には有意な正の相関関係があることを明らかにした。
2) 大学サッカー選手における攻撃プレーに関する認知と知識表象 (平成 25 年度日本スポーツ心理学会優秀論文 奨励賞受賞論文)	共著	2012年9月	スポーツ心理学研究 第 39 卷, 第 2 号 pp 137-151	共著：夏原隆之・山崎史恵・浅井武 競技レベルの異なる大学サッカー選手の攻撃プレーに関する認知能力と、それを支える顕在的知識の定量的な差異を調査し、競技レベルの高い選手は、状況の理解やプレー動作に関する知識が発達していることを明らかにした。
3) サッカー選手の認知プロセスにおける熟達度に関連した違いー眼球運動と言語報告からの検討ー (後掲)	共著	2013年11月	日本機械学会シンポジウム:スポーツアンドヒューマンダイナミクス 2013 講演会講演論文集 pp.307-1-307-5 (USB)	共著：夏原隆之, 中山雅雄, 加藤貴昭, 永野智久, 佐々木亮太, 吉田拓矢, 赤野祥朗, 浅井武 熟練度の異なるサッカー選手の認知プロセスを調査し、熟練者は探索率の高い方略を用いて状況を詳細に捉え、運動動作の直前に重要な位置に視線を留めていることを明らかにした。
4) サッカーにおける戦術的判断を伴うパスの遂行を支える認知プロセス	共著	2015年6月	体育学研究 第 60 卷第 1 号 pp 71-85	共著：夏原隆之, 中山雅雄, 加藤貴昭, 永野智久, 吉田拓矢, 佐々木亮太, 浅井武 サッカー選手が戦術的判断を伴うパスを遂行する時、どのように視覚情報を処理しているのかについて検討した。その結果、熟練者の優れたパスパフォーマンスは、サッカー特有の精緻化された知識基盤を用いて、効率よく的確に視覚情報を抽出することに起因していることが示唆された。

<p>5) サッカーの状況判断における予測パターンに基づく視覚情報処理方略 (学位論文)</p>	<p>単著</p>	<p>2015年11月</p>	<p>筑波大学大学院 3 年制 博士課程人間総合科学 研究科コーチング学専 攻 博士論文 pp. 1-105.</p>	<p>熟練度の異なるサッカー選手を対象に、 認知的側面と知覚-運動連関の2側面か らサッカーの状況判断におけるパフォー マンス、知覚・認知スキル、知識の關係 を分析し、素早かつ確かな状況判断をす るための視覚情報処理方略を検討した。サ ッカー熟練者はこれまでの経験によって 蓄積されたプレーに関する知識をベース に、フィードフォワード的に予測パター ンを働かせて、いつでも見るべきか、 この先どういう展開になるかを予測し、 効率的に視覚情報を処理し、プレーして いることを明らかにした。 頁数：pp. 1-105.</p>
<p>6) 高校サッカー競技者と コーチとの人間関係に ついての検討</p>	<p>共著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>東京成徳大学研究紀要 - 人文学部・応用心理学 部 - 第23号, pp. 93-102.</p>	<p>共著：木幡日出男，岡田弘隆，石井辰典， <u>夏原隆之</u>，市村操一 高校サッカー部員を対象に、普段感じて いるコーチ-競技者の人間関係とコーチ に対する信頼感について質問紙を用いて 調査した。その結果、コーチ-競技者の 人間関係については、「関わり」「親密さ」 「相補性」が優位に低いことを明らかに した。加えて、信頼感に関する要因につ いて、高校生競技者のコーチに対する信 頼感が優位に低いことを明らかにした。 つまり、高校生競技者と指導者の間の人 間関係は、ラポール形成が十分になされ ているとは言い難く、指導する上で大き な問題である可能性が示唆された。 頁数：pp. 93-102.</p>
<p>7) サッカーの状況判断に おける知覚認知スキル の研究動向と今後の課 題</p>	<p>共著</p>	<p>2017年10月</p>	<p>コーチング学研究 第60巻，第1号 pp. 1-10.</p>	<p>共著：<u>夏原隆之</u>，加藤貴昭，中山雅夫， 浅井武 サッカーの状況判断に関わる知覚認知ス キルとコーチング学との関連について概 観した。サッカー熟練者は、これまでの 経験によって蓄積された知識をベースに 効率的に視覚情報を処理し、的確に状況 判断していると示された。コーチング学 の立場から、獲得させたいスキルの学習 を自ずと促進させることができるアプ ローチの一つとして、環境や課題の制約を 考慮した知覚認知スキル研究が、今後の 研究課題の一つであることを提起した。</p>
<p>8) サッカー選手の情報処</p>	<p>共著</p>	<p>2017年11月</p>	<p>日本機械学会講演論文</p>	<p>共著：松竹貴大，<u>夏原隆之</u>，小井土正亮，</p>

<p>理能力に関する研究 (後掲)</p>			<p>集 2017, pp. U00052-1 - U00052-6.</p>	<p>鈴木健介, 中山雅雄, 浅井武 本研究では, 生理学的指標と神経心理学的指標を用いて, サッカー熟練者の脳内情報処理の特性を明らかにする事を目的とした. その結果, 選択反応課題において, サッカー熟練者は, 刺激に対する評価や反応が早いことを示した. また, 生理学的指標と神経心理学的指標の関連性の検討から, サッカー熟練者の運動・反応処理における優位性と実行機能の優位性は, 相互に関連していると考えられる.</p>
<p>9) 競技力が高いサッカー選手の状況判断時における脳内情報処理過程—事象関連電位と筋電図反応時間を指標として—</p>	<p>共著</p>	<p>2018年2月</p>	<p>日本体力医学会 67巻, pp. 107-123.</p>	<p>共著: 松竹貴大, 夏原隆之, 小井土正亮, 鈴木健介, 田部井祐介, 中山雅雄, 浅井武 本研究では, 事象関連電位 (ERP) を指標に, サッカー選手の脳内情報処理能力について検討した. その結果, 複雑な選択反応課題において熟練者群は未熟練者群と比較して, ERP 早期成分 (N200, P300) における有意に短い潜時, 反応時間が有意に短いことを示した. これらの結果から, 熟練者は未熟練者よりも, 状況の素早い見極めと運動出力のいずれも素早く行われていることから, 中枢の情報処理能力に優れていることが示唆された.</p>
<p>10) 運動時の声かけは周囲への注意にどのような影響を及ぼすのか</p>	<p>単著</p>	<p>2018年9月</p>	<p>千葉県体育学研究</p>	<p>本研究では, 注意力の低下を招く運動強度での運動状況下において, 他者からの声かけが, 周囲の状況変化に対する知覚にどのような影響を及ぼすのかについて検討した. その結果, 他者からの声かけは, 注意の幅を広げ, 周囲で起こる状況変化への気づきに寄与することが推察された. スポーツにおける声かけは, 注意の広がりや状況変化への気づきを促す効果があり, パフォーマンスを支える重要な特徴の一つであると考えられる.</p>
<p>11) 練習時間の告知が練習中の行動に及ぼす影響</p>	<p>単著</p>	<p>2019年3月</p>	<p>身体運動文化研究 第24巻, 第1号, pp. 1-9.</p>	<p>本研究では, 練習中の行動に対する時間告知の有無の影響について検討した. その結果, 練習時間の告知は, 練習関連行動を促進させる一方, 練習時間が告知されなかった時, 練習とは関係のない行動に多くの時間を費やすことが確認された. つまり, 練習時間の告知は, 単に練習時間を決めるといったマネジメント的</p>

<p>12) Decision-Making While Passing and Visual Search Strategy During Ball Receiving in Team Sport Play</p>	<p>共著</p>	<p>2020年1月</p>	<p>Perceptual and Motor Skills, Vol. 127, No. 2, pp. 468-489</p>	<p>役割を果たしているだけでなく、練習に対してどのように取り組むかに大きな影響を及ぼすことが示唆された。</p> <p>共著：夏原隆之，加藤貴昭，中山雅雄，吉田拓矢，佐々木亮太，松竹貴大，浅井武</p> <p>本研究では、熟練度の異なるサッカー選手を対象に、状況判断場面における味方ボール保持局面とパスレシーブ局面中の視覚探索方略について検討した。その結果、味方ボール保持局面では、チームメートや相手選手、スペースに視線を向け、パスレシーブ局面では、ボールやパスを出すチームメートに視線を向けていることが分かった。また、競技レベルの違いによって、対象を見る時間や注意の向け方に違いがあることが明らかにされた。</p>
<p>13) スポーツ・コーチ教育への変革型リーダーシップ理論の導入の試みの紹介</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>東京成徳大学紀要 第27号, pp. 73-86</p>	<p>共著：夏原隆之，中山雅雄，岡田弘隆，川北準人，市村操一</p> <p>本研究の目的は変革型リーダーシップ (Transformational leadership: TFL)理論を導入してコーチ育成プログラムを行うようになった背景およびコーチの行動変容を促す新しいコーチ教育プログラムのワークショップ内容について論ずることであった。スポーツコーチング領域におけるトレンドの一つは、コーチの教育、能力向上に関することであり、今後は、変革型リーダーシップがアスリートの心理や行動等に与える影響について検討していくことが課題の一つである。</p>
<p>(その他) (研究報告書) 1) サッカーのパス動作における視覚行動</p> <p>2) 児童期および青年期の子どもにおける非認知スキルの発達とスポーツ活動との関連性に関する研究—スポーツの何が非認知スキル</p>	<p>共著</p>	<p>2013年8月</p>	<p>いばらき健康・スポーツ科学 第30号, pp. 63-64.</p> <p>2017年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書 pp. 293-299</p>	<p>共著：夏原隆之，中山雅雄，浅井武</p> <p>サッカー熟練者と初心者の視覚探索行動の特徴について検討した。その結果、サッカー熟練者は中心視によって精度良く視対象を追跡し、より広い状況を捉える際、頻繁に注意の切り替えを行いながら状況を捉えていることを明らかにした。</p> <p>共著：夏原隆之，加藤貴昭</p> <p>本研究では、スポーツ経験を有する小中学生および、スポーツ経験のない中学生を対象に、スポーツ活動と非認知スキルの関係について検討することを目的とし</p>

<p>の獲得に寄与しているのか?—</p> <p>3) 青年期の子どもを対象とした非認知能力アセスメントツールの開発</p> <p>(学会発表)</p> <p>1) サッカーにおける選択的注意と知識の関係について:競技レベルの違いによる検討</p> <p>2) サッカー熟練者のパス動作における視覚行動の特徴に関する研究</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>印刷中</p> <p>2010年9月</p> <p>2012年11月</p>	<p>2020年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書</p> <p>日本体育学会第61回大会</p> <p>日本スポーツ心理学会第39回大会</p>	<p>た。結果では、スポーツ経験を有する子どものほうが、スポーツ経験のない子どもよりも非認知スキルが高いことが示された。この結果は、スポーツにおける教育的価値の理解や、非認知スキルを養うためのスポーツへの取り組み方に新たな視点が付加される可能性がある</p> <p>共著：夏原隆之，山田裕生，加藤貴昭 本研究の目的は、非認知能力測定尺度を開発することであった。研究1では、非認知能力における心の強さ尺度、学習力尺度について探索的因子分析を行い、心の強さ尺度は、レジリエンス、忍耐力、自制心の3因子構造(24項目)、学習力尺度は、コントロール、メタ認知知識、モニタリングの3因子構造(14項目)が確認された。研究2では、心の強さ尺度および学習力尺度の信頼性および妥当性を検証し、いずれも高い数値が確認された。</p> <p>共著：夏原隆之，山崎史恵 サッカー選手に対する認知課題および予測課題に関するインタビュー分析から、選択的注意と知識の関係について検討した。その結果、競技レベルの高い選手は、プレーにより関連している場所を選択的に正確に記憶していた。また、プレー展開を予測する際の言語報告分析では、競技レベルの高い選手は、プレー状況の把握とプレー動作の選択に関する質の高い知識を豊富に有していることを明らかにした。</p> <p>共著：夏原隆之，伊藤瑞希，中山雅雄 知覚と行為の相互依存性を考慮し、実際の運動中の眼球運動計測を行った。サッカー熟練者を対象に、サッカーの状況判断映像を提示し、ハンドパスおよびインサイドパス遂行中の視覚行動を検討した。その結果、平均注視時間において、インサイドパスとハンドパスの間に有意差が認められた。インサイドパスでは、ボールを蹴るためにヘッドダウンしなければならないために、注視時間がハンドパスよりも短くなったと考えられる。</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------	-------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>3) サッカーのパス動作における視覚探索行動 (日本フットボール学会 10th Congress 学会奨励賞受賞研究)</p>	<p>共著</p>	<p>2012年12月</p>	<p>日本フットボール学会 10th Congress</p>	<p>共著：夏原隆之，伊藤瑞希，中山雅雄，浅井武 サッカー熟練者および初心者を対象に，ハンドパスおよびインサイドパス遂行中の視覚探索行動について検討した。その結果，熟練者は初心者と比較して，注視回数が有意に多く，左右方向への注意の切り替えについても頻繁に行っていた。つまり，注意の切り替えを必要とするようなより広い状況を捉える際には，眼前の状況だけを捉える際の視覚探索行動とは異なることが推察された。</p>
<p>4) サッカープレイヤーの視覚探索方略—パスレシーブ局面に着目して—</p>	<p>共著</p>	<p>2013年8月</p>	<p>日本体育学会 第64回大会</p>	<p>共著：夏原隆之，中山雅雄，加藤貴昭，永野智久，浅井武 熟練度の異なるサッカー選手を対象に，眼球運動計測技法を用いて，サッカーのパスレシーブ局面中のサッカー選手の視覚探索方略を検討した。その結果，サッカー上級者は中級者と比較して，注視時間が短く，多くの場所を注視する探索率の高い方略を用いて情報を収集していた。また，パスをする直前には，正確なパスの遂行のために重要と考えられる場所に注視を向けるといった視覚探索方略を用いていたことを明らかにした。</p>
<p>5) サッカー選手の認知プロセスにおける熟達度に関連した違い—眼球運動と言語報告からの検討— (再掲)</p>	<p>共著</p>	<p>2013年11月</p>	<p>日本機械学会シンポジウム：スポーツアンドヒューマンダイナミクス 2013</p>	<p>共著：夏原隆之，中山雅雄，加藤貴昭，永野智久，佐々木亮太，吉田拓矢，赤野祥朗，浅井武 熟練度の異なるサッカー選手を対象に，サッカーにおける意思決定場面の映像を提示し，意思決定する際の視覚探索活動および状況判断に関わる知識について調査した。その結果，サッカー上級者は中級者と比較して，短い注視時間で多くの場所を注視する探索率の高い方略を用いて，プレー状況を詳細に捉えていることを明らかにした。また上級者は中級者よりもプレー状況を的確に把握するための知識に優れていることを明らかにした。</p>
<p>6) Visual search behaviors of soccer players in a simulated decision-making task</p>	<p>共著</p>	<p>2015年5月</p>	<p>8th World Congress on Science & Football</p>	<p>共著：夏原隆之，中山雅雄，加藤貴昭，永野智久，浅井武 サッカーの攻撃プレー状況において，サッカー選手が戦術的判断を伴うパスを遂行する際の視覚探索行動について検討し</p>

7) サッカーのパス遂行場面における熟練選手の視覚探索特性	共著	2015年8月	日本体育学会 第66回大会	<p>た。熟練者は、パスを受ける前の局面ではディフェンダーに視線を向けていた。また、味方にパスをする直前の局面では、パスを送る先の味方選手に視線を向けていた。つまり、サッカー熟練者は状況に応じて視線をコントロールしており、視線を向けるタイミングと時間が正確な意思決定に依存することを示した。</p> <p>共著：夏原隆之，中山雅雄，加藤貴昭 永野智久，浅井武</p> <p>サッカーにおけるパス遂行に至るまでの視覚探索活動について，眼球運動計測と言語報告を用いて検討した。その結果，熟練者と準熟練者の最も大きな違いは，相手に関する情報を抽出するか否かであった。サッカー熟練者は，相手の情報を踏まえた上で状況を把握していた。その上で，熟練者はパスを受ける前とする前で見える対象を変えており，意図を持った視線のコントロールが状況判断の重要なポイントであることを明らかにした。</p>
8) サッカーにおける Take The First ヒューリスティックの有効性—サッカーにおけるパス選択場面を用いた検討—	共著	2015年9月	日本心理学会 第79回大会，	<p>共著：石井辰典，夏原隆之，木幡日出男</p> <p>本研究では，サッカーにおけるパス選択場面において最初に思いついた選択肢を選ぶ方略（Take The First）について検討した結果，選択肢を挙げた順番に評価が下がることが確認され，先行研究（Johnson & Raab, 2003）を支持する結果であった。したがって，時間的・空間的制約の厳しいプレー環境においては，素早く意思決定することが重要であることが示唆された。</p>
9) サッカー選手の判断時における脳内情報処理過程	共著	2015年9月	日本スポーツ心理学会 第42回大会	<p>共著：松竹貴大，夏原隆之，田部井祐介，中山雅雄，浅井武</p> <p>サッカー選手の情報処理能力を定量的に評価するために，熟練度の異なるサッカー選手を対象に，状況判断課題を実施した。結果では，脳が刺激を評価して筋運動が開始されるといった従来の解釈とは異なる結果を示した。したがって，脳からの予測や命令といったトップダウン処理ではなく，受容感覚からのボトムアップ処理によって情報を処理しているという新たな解釈の可能性が示された。</p>
10) 高校サッカー選手とコ	共著	2016年3月	日本フットボール学会	共著：木幡日出男，夏原隆之

<p>ーチとの人間関係に関する調査分析について</p>			<p>13th Congress</p>	<p>高校生における課外活動所属の選手とコーチとの人間関係について調査した。高校サッカー選手とコーチとの人間関係を質問紙を用いて調査分析した。その結果、高校サッカー選手が普段感じているコーチとの人間関係は、「関わり」が薄く、「親密さ」も淡薄で「相補性」も浅い傾向がみられ、満足できるものではないことを明らかにした。このような関係性は、指導する上でも大きな問題であることが示唆された。</p>
<p>11) クロスボール処理準備時間相におけるサッカー選手の視覚探索方略-フェーズ間における視線配置の変容</p>	<p>共著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>日本フットボール学会 13th Congress</p>	<p>共著：伊藤瑞希，中山雅雄，<u>夏原隆之</u>，浅井武 サッカーにおいてクロスボールが蹴られる直前の準備時間相に着目し，ゴールキーパー（GK）経験者と GK 未経験者の予測正確性および判断の一貫性，視覚探索活動の差異について検討した。その結果，GK 経験者は GK 未経験者と比較して，クロスボールの到達位置を一貫して正確に予測していたことを明らかにした。その要因として，クロスボールが蹴られる前の時間相において，熟練 GK は，キッカーに視線を移していることを明らかにした。</p>
<p>12) サッカーのクロスボール処理準備時間相におけるサッカー選手の視覚探索方略-各フェーズにおけるゴールキーパー経験者と未経験者の比較</p>	<p>共著</p>	<p>2016年3月</p>	<p>日本コーチング学会 第 27 回大会 第 9 回日本体育学会体育方法専門領域研究会，</p>	<p>共著：伊藤瑞希，中山雅雄，<u>夏原隆之</u>，松竹貴大，浅井武 サッカーのクロスボール処理準備時間相に着目し，ゴールキーパー（GK）経験者と GK 未経験者の視覚探索活動の差異について検討した。その結果，クロスボールを上げる選手がまだボールを持っていない局面では，GK 経験者は有意にボール保持者およびボール周辺に視線を配置させていたが，クロスボールが蹴られる直前には，クロスボールを上げる選手に視線を配置させていたことを明らかにした。</p>
<p>13) Brain Information Processing of Football Players during Decision Making</p>	<p>共著</p>	<p>2016年7月</p>	<p>21st annual Congress of the European College of Sport Science</p>	<p>共著：松竹貴大，<u>夏原隆之</u>，田部井祐介，中山雅雄，浅井武 競技レベルの異なるサッカー選手を対象に，状況判断課題における情報処理過程について検討した。3 vs.1 および 4 vs.2 状況において，どこにパスすべきかを選択させる課題時の筋電図と脳波を分析し</p>

<p>14) 熟練したサッカー選手の状況判断時における脳内情報処理の特性</p>	<p>共著</p>	<p>2016年8月</p>	<p>日本体育学会 第67回大会</p>	<p>た。結果では、脳での反応よりも先に筋反応が生じていることを明らかにした。つまり、脳からの指令で予測や評価するのではなく、受容感覚からの評価が可能ということであり、内受容感覚的推論と関連付けて説明できる可能性が示唆された。</p> <p>共著：松竹貴大，夏原隆之，田部井祐介，中山雅雄，浅井武</p> <p>サッカーのパス回し課題における事象関連電位（ERP），筋電図反応時間（EMG-RT），反応時間（RT）を測定し，熟練サッカー選手が状況判断する際の情報処理特性について検討した。その結果，EMG-RT および RT において，群間に有意差が示された。熟練者は準熟練者と比較して，プレーを実行する際「どのような状況か」という状況評価よりも，「その状況で何をすべきか」という反応・運動の処理が，より先行して賦活する傾向であることが示された。</p>
<p>15) Proficiency-related differences in perceptual-cognitive expertise, executive function, grit of Soccer players</p>	<p>共著</p>	<p>2017年5月</p>	<p>World Conference on Science & Soccer 2017</p>	<p>共著：夏原隆之，加藤貴昭，松竹貴大，中山雅雄，浅井武</p> <p>サッカー選手の知覚認知スキル，実行機能，忍耐力における熟練差を検討した。熟練者は，守備者に長い時間視線を向けていることが明らかとなった。また，熟練者は，実行機能における創造性や心理特性である忍耐力に優れていることも示された。これらのことから，熟練者はサッカー特有の知覚認知スキルだけでなく，実行機能や忍耐力といった熟達に寄与すると思われる様々な心理的要因に優れていると考えられる。</p>
<p>16) Characteristics of decision making ability in expert soccer players: A focus on brain information processing and execution function</p>	<p>共著</p>	<p>2017年5月</p>	<p>World Conference on Science & Soccer 2017</p>	<p>共著：松竹貴大，夏原隆之，小井土正亮，鈴木健介，田部井祐介，中山雅雄，浅井武</p> <p>熟練度の異なるサッカー選手の状況判断中の脳内情報処理特性について検討した。その結果，熟練者は準熟練者と比較して，実行機能における創造性や，素早く正確にプレーを実行することに優れていることが示された。したがって，反応・運動の処理速度の速さが，熟練者の脳内情報処理特性の一つであるが，これには，</p>

<p>17) Visual search strategies of soccer players in offensive situation of soccer: combining eye movement and retrospective verbal protocol data</p>	<p>共著</p>	<p>2017年7月</p>	<p>International Society of Sport Psychology 14th World Congress</p>	<p>実行機能が影響していることが推測される。 共著：夏原隆之，松竹貴大，加藤貴昭，中山雅雄，浅井武 熟練度の異なるサッカー選手を対象に，サッカーの攻撃状況における視覚探索方略を調査した．サッカー熟練者は準熟練者と比較して，スペースよりも味方や相手を中心に注意を配分していることを示した．また，言語報告では，熟練者は，相手選手に関する情報に注意を向ける傾向を示した．サッカーにおいては，スペースの位置よりも相手や味方の位置や状況が，熟練した意思決定を支える重要な情報源になっていることが示唆された．</p>
<p>18) Reaction time of Japanese expert football players during decision making</p>	<p>共著</p>	<p>2017年7月</p>	<p>International Society of Sport Psychology 14th World Congress</p>	<p>共著：松竹貴大，夏原隆之，小井土正亮，鈴木健介，田部井祐介，中山雅雄，浅井武 筋電図反応時間及び反応時間を用いて，実際のプレー状況を想定した選択反応課題における熟練サッカー選手の脳内情報処理特性について検討した．その結果，熟練者は，素早く正確なプレーの遂行ができることが示された．これは，熟達が進むことによって，中枢神経での活動を減少させ，数少ない神経リソースを用いて，反応処理を実行することによって，効率よく身体を動かしていることが推測される．</p>
<p>19) 集団スポーツにおける集団効力感とチームメイトに対する心理的ストレスの関係</p>	<p>共著</p>	<p>2017年9月</p>	<p>日本体育学会 第68回大会</p>	<p>共著：夏原隆之，市川雄大，中山雅雄，浅井武 競技レベルの異なる15歳から18歳までの高校生サッカー選手772名を対象に，質問紙を用いて，集団効力感(CE)とチームメイトとの人間関係に関する心理的ストレス過程(認知的評価やストレス反応)について検討した．その結果，競技レベル高群は，人間関係の問題に対してポジティブに捉え，建設的に行動する傾向にあることが示された一方で，競技レベル低群は，ネガティブに捉え，破壊的に行動する傾向が示された．</p>
<p>20) サッカー選手の情報処理能力に関する研究</p>	<p>共著</p>	<p>2017年11月</p>	<p>日本機械学会シンポジウム：スポーツアンドヒ</p>	<p>共著：松竹貴大，夏原隆之，小井土正亮，鈴木健介，中山雅雄，浅井武</p>

<p>(再掲)</p>			<p>ユーマンダイナミクス 2017</p>	<p>本研究では、生理学的指標と神経心理学的指標を用いて、サッカー熟練者の脳内情報処理の特性を明らかにする事を目的とした。その結果、選択反応課題において、サッカー熟練者は刺激に対する評価や反応が早いことを示した。また、生理学的指標と神経心理学的指標の関連性の検討から、サッカー熟練者の運動・反応処理における優位性と実行機能の優位性は、相互に関連していると考えられる。</p>
<p>21) スポーツに取り組む小学生は、活動年数に伴って非認知能力が高まるのか？</p>	<p>共著</p>	<p>2017年11月</p>	<p>日本スポーツ心理学会 第44回大会</p>	<p>共著：夏原隆之，加藤貴昭 スポーツをしている小学4年～6年生を対象に、スポーツ活動年数と非認知能力（自制心，忍耐力，レジリエンス）の関係について検討した。非認知能力とは、知能以外で教育や労働市場における成果に影響を及ぼす要因である。結果では、スポーツ活動年数の増加に伴って、非認知能力が向上するわけではないことが示された。非認知能力を育むためには、スポーツ活動の中で体験する他の要因が鍵を握っていることが推測できる。</p>
<p>22) 熟練サッカー選手における実行機能と視覚探索活動</p>	<p>共著</p>	<p>2018年8月</p>	<p>日本体育学会 第69回大会</p>	<p>共著：夏原隆之，加藤貴昭，中山雅雄，浅井武 熟練度の異なるサッカー選手を対象に、視覚探索活動，実行機能，パフォーマンスの関係について検討することを目的とした。結果では、熟練サッカー選手は意思決定の正確性が高いことが示された。視覚探索活動においては、熟練者は守備者に対して長い時間視線を配置させていた。実行機能においては、熟練者は認知的柔軟性に優れており、新たな解決策を見出す、素早く作戦を変更するといった能力が優れている可能性が示唆された。</p>
<p>23) 中学生におけるスポーツ経験と非認知能力の関係</p>	<p>共著</p>	<p>2018年11月</p>	<p>日本スポーツ心理学会 第45回大会</p>	<p>共著：夏原隆之，加藤貴昭 中学生を対象に、スポーツ経験者と未経験者の非認知能力について検討した。その結果、スポーツ経験者はスポーツ未経験者よりも、非認知能力が有意に高いことが示された。また、スポーツ経験者の中でも、集団スポーツ経験者は、個人スポーツ経験者よりも、非認知能力が有意に高いことが示された。その上、6年以上のスポーツ経験者は、スポーツ経験が</p>

<p>24) 非認知能力に関する尺度開発の試み</p>	<p>共著</p>	<p>2019年11月</p>	<p>日本スポーツ心理学会 第46回大会</p>	<p>3年未満の者よりも、非認知能力が有意に高いことが示された。</p> <p>共著：夏原隆之，山田裕生，坂本悠馬，加藤貴昭</p> <p>大学生478名を対象に非認知能力を測定する尺度開発について検討した。既存の心理尺度をもとに93項目を作成し，得られたデータに基づいて探索的因子分析を行った。結果では「自他への誠実さ(18項目)」「主体的に学習する力(14項目)」「精神的たくましさ(12項目)」の3因子構造から成る非認知能力測定尺度が作成された。今後の課題は，他の既存尺度との基準関連妥当性や予測的妥当性，構成概念妥当性の検討である。</p>
<p>25) アンガータイプの異なる大学サッカー選手における怒り生起時の思考の特徴</p>	<p>共著</p>	<p>2020年3月</p>	<p>日本コーチング学会 第31回大会</p>	<p>共著：坂本悠馬，夏原隆之</p> <p>相手からのラフプレーに対する怒りに着目し，アンガータイプの違いによって，怒り生起時の思考内容にどのような違いがあるのかについて検討した。その結果，怒り抑制型の選手は，怒りを抱きつつも，我慢し気丈に振る舞う傾向であった。怒り統制型の選手は，抱いた怒りをプレーする以上避けられないものと合理化させていた。怒り表出型の選手は，即座に報復することを考え，暴言やファウル等の行動に移す傾向にあった。</p>
<p>(学会講演)</p> <p>1) 平成25年度日本スポーツ心理学会優秀論文奨励賞受賞記念講演</p>	<p>単独</p>	<p>2013年11月</p>	<p>日本スポーツ心理学会 第40回大会</p>	<p>平成25年度日本スポーツ心理学会優秀論文奨励賞に選出された論文に関する記念講演を行った。</p>
<p>(研究会発表)</p> <p>1) 2017年度笹川科学・笹川スポーツ研究助成研究発表会</p>	<p>単独</p>	<p>2018年4月</p>	<p>2018年度笹川科学・笹川スポーツ研究助成研究発表会</p>	<p>研究助成を受けた研究課題について，その成果を発表した。</p>